大学生における性格形成要因の自己認識

松井　三枝，　　牛　麗莎

はじめに

現代日本の大学生は，受験戦争をくぐり抜けた後，心理・社会的に自己形成の途上期間にいるといえる。心理的には疾風怒濤の時代ともいわれ，自己同一性，人生の目標，生き甲斐などを思索し，心の葛藤に満ち，精神的に動揺しやすい時代である。

そのような大学生活をスタートしたばかりの学生は，現在の自分の性格がどのようにして形成されてきたと認識しているのであろうか？性格形成についての自己認識は，自己理解のための第一歩ともいえるであろう。本研究では現代大学生におけるこのような性格形成の自己認識の動向を調査することとした。

方　法

被検者と手続き

平成10年度富山医科薬科大学医学部（医学科，看護科）と薬学部１年生で「心の科学」受講生189名（男性72名，女性117名）に対して，「パーソナリテイの理解」のトピックスについての講義開始前（４月）に，自分のパーソナリテイはどのようにして形成されてきたかを問う自己記述式質問紙（付録，藤本ら，1993をもとに作成）を集団実施した。被検者の年齢は18歳～38歳（平均19.4±2.4（SD）歳；男性，平均20.1±3.0（SD）歳；女性，平均19.0±1.8（SD）歳）であった。質問に対して，最高５つまで回答できるようにした。

結　果

記述された回答は，延べ数710（５つ記載者64名，４つ49名，３つ51名，２つ17名，１つ７名）であった。これら全回答についての内容を分析し，頻度が５以上（すなわち，５名以上があげた要因）のものを表に頻度順に示した。これらは全回答の84.2%であった。表に示されたように，自己の性格がつくられた要因として，友人が最も多く，ついで，きょうだい，親が多かった。

考　察

性格形成については，遺伝か環境かという大きな視点がまず基本的にある。一般に，性格は，双方の要因が相互に作用しあって形成されると考えられる。高橋（1968）は性格形成に影響する刺激の種類として，遺伝要因，体内環境，家庭環境，地域社会，学校，職業，民族・国家，薬品・アルコール中毒，およびホスピタリズム，野生児などの極限例をあげている。本結果では，生ま

表　性格形成要因の回答頻度

要　　因	頻　度
友人	70
きょうだい	63
親	59
地域／自然環境	43
家族	42
母	34
祖父母	29
父	25
学校	20
第１子	18
スポーツ	17
受験	16
末っ子	16
人との関わり	13
先生	13
テレビ	13
一人っ子	12
動物	10
部活	10
自由／放任	10
体型／身体状況	10
本	8
転校	7
生まれつき，遺伝	7
親戚	6
近所	6
習い事	6
甘やかし	5
片親不在	5
いじめ	5

れつき，および遺伝をあげた者は７名のみであった。また，体型や身体状況をあげた者は10名であった。これらは，生来的，生物学的要因であるが，こういった側面をあげた学生は多くなかったといえる。したがって，性格という場合，第１に環境的要因の方が着目されやすいことがわかった。遺伝ならびに素質ということは，言葉を換えれば，内からはたらきかけるものであり内的要因ということになる。一方，環境は外側からはたらきかけるものであり外的要因ということになる。詫摩ら（1990）は性格の発達に及ぼす外的要因として，a）生まれた家庭の要因，b）家族構成，c）育児方法や育児態度，d）友人関係・学校関係，およびe）文化的・社会的要因の５つをあげている。本結果からは，これらのうちのa）およびd）の要因を取り上げた者が圧倒的に多かった。大部分の学生は，これ（高校生）まで家庭と学校での生活を中心にして過ごしてきてお

り，ある意味では当然と言えるかも知れない。特に，友人や親，きょうだいの影響をとりあげる者は大変多かった。しかし，学校の先生をあげた者は13名とそれ程多いとはいえない。また，育った地域や自然環境（たとえば，田舎か都会かなど詫摩ら（1990）のe）にあたる）をあげた者も43名と比較的多かった。現代人らしい回答としては，受験，テレビがあげられる。一方，本の影響は8名とそれほど多くなかった。

1卵性双生児と2卵性双生児の性格の比較研究（Shield & Slater, 1960）などから明かになってきたように，性格は素質を基礎にさまざまな環境や人間関係に対する適応過程を通して形成されると考えるのが妥当である。しかし，内的要因，外的要因はともにどちらかというと受動的な側面といえる。さらに詫摩ら（1990）は意欲的，能動的に自分でつくっていこうとする要因，すなわち，自己形成の要因を取りあげている。この要因は思春期以降に果たす役割が大きい。大学生ではまさにこれからこの要因の関与が出てくるものと思われる。日本の現状では，大学受験まで学生たち（特に，ストレートで入学した大学生）は忙しい日々を強いられ，自分について深く考える機会がほとんどない。大学に入った後ようやく，自分とは何ものなのかを考えはじめる時期がくるといえる。本調査では自己形成に関した要因は少なかった（スポーツ17名と本8名程度)。今後，大学生活を送っていく中で，こういった要因が増えていくことが予測されるだろう。

参考文献

青柳　肇，杉山憲司（1996）パーソナリテイ形成の心理学，福村出版

藤本忠明，栗田喜勝，瀬島美保子，橋本尚子，東　正訓（1993）ワークショップ心理学，ナカニシヤ出版

Shield, J., & Slater, E. (1960) Heredity and psychological abnormality. In H.J.Eysenck, (Ed.), Handobook of abnormal psychology. Pitman Med. Publ.

高橋たまき（1968）幼児期経験と行動特性，教育心理学年報，8，55-63.

詫摩武俊，瀧本孝雄，鈴木乙史，松井豊（1990）性格心理学への招待，サイエンス社

付　録

現在のあなたのパーソナリテイは，どのようにして形成されてきたのでしょうか？思いつくことをすべて書き出して下さい。(例）おばあちゃん子だったから。

1．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

4．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5．＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿